

関屋光彦先生

木幡瑞枝

このところ毎年、大学にとって大切なキリスト者の方々の、定年による御退職がつづいている。関屋光彦先生もそのおひとりである。

先生は栃木の御出身であるが、のちに枢密顧問官に列せられた御父上の、当時の御任地京城でお生れになった。90才をこえられてなお御健在の御母上が、先生は御兄弟中いちばんの腕白だったと仰言った由、まことにほほえましい。

昭和18年旧制松本高校（24年から信州大学）教授としてその地へ赴かれてから、このほど本学を御退職なさるまで、先生は35年にわたって大学教育にたずさわって来られたのである。

その間先生が師事された塚本虎二先生の丸の内聖書研究会に御夫妻で参加され、主宰者が病をえられてこれを閉じられたあと、昭和36年から御自宅で聖書研究会を開かれ今日に及んでいるほか、キリスト教雑誌「共助」への参加、その他のキリスト教誌への寄稿等の活動をされている。

またICU御退職直後から調布市深大寺に深大寺学寮を建てられ、ICU、津田塾大、東京女子大等の女子学生7,8人を収容され、毎週御夫妻で礼拝を行って、聖書の精神に立ち、学問研究に真摯であり、生活の中から学ぶことを旨とした協同生活をさせ、すでに40余人の寮生を送り出された。

さらに昭和45年からは大学生、大学院生、社会人を含めて古典共同研究会を主宰、夏には集中ゼミも行われている。

こうしてみると、如何に先生が御専攻の哲学とキリスト者としての御生活とを渾然融和されているかが、よくわかるのである。

昭和46年春、先生は若いスタッフばかりの教養科へまるで家長のように就任された。先生は本学の精神を直ちに理解され、牟礼に足を踏み入れられたその日から、キャンパスやそこに住まう人たちに、並々ならぬ愛情をもって接して下さった。御退職まぎわ学報303号に先生が記された「学園に7年を過して」を拝読すると、ますますその感が深い。「ここは私が過して来た大学のなかでいちばん立派です」「牟礼に息づいているこの精神、これを大切にしなければ」と先生が仰言ったのを何度私は耳にしたことだろう。

先生が担当された科目を受講した学生たちは、一見温厚な御様子の先生の、一高生であられた頃そのままのような、若々しい真率な情熱に心打たれたことであろう。幸い御退職後も週三度御出講下さることになった。今後も残された者に先生の御心のわ

たることを、衷心お願いしてやまない。

関屋光彦教授略年譜

- 明治45年4月1日 京城に生れる。
昭和7年3月 第一高等学校文科丙類卒業。
昭和10年3月 東京帝国大学文学部哲学科卒業。
昭和10年4月 東京帝国大学文学部大学院（哲学専攻）入学。
昭和13年5月 臨時召集をうけ補充兵として歩兵第59連隊に入隊。8月病気の
ため宇都宮陸軍病院に入院。11月退院，帰郷療養を命ぜられ，
国民兵役に編入される。
昭和16年3月 東京帝国大学文学部大学院満期退学（兵役のため延期）。
昭和14年9月 青山学院中学部教諭。
昭和15年4月 青山学院専門部兼任講師（17年3月まで）。
昭和16年3月 青山学院中学部退職。
昭和16年9月 文部省専門学務局学務課嘱託（18年11月まで）。
昭和17年4月 東京女子高等師範学校および東京女子教員養成所講師。
昭和18年12月 松本高等学校教授（旧制）。
昭和24年4月 学制改革により信州大学文理学部助教授，翌年4月同教授。
昭和26年4月 津田塾大学教授。
昭和29年4月 国際キリスト教大学教授。（37年秋まで津田塾大学講師）。
昭和41年8月 国際キリスト教大学退職。（45年3月まで講師）。
昭和42年4月 東海大学文学部教授。
昭和46年4月 東京女子大学短期大学部教授。翌年から文理学部へも出講。
昭和53年3月 東京女子大学定年退職。

論文

- 国民の新しい性格の形成（「独立」10号 昭和24）
宗教的寛容の問題について（ICU紀要「教育研究」2，3号 昭和30）
エブラハム・リンカーンの研究（塚本先生信仰50年記念論文集「聖書とその周辺」
昭和34）
日本の教育とキリスト教一序章（ICU紀要「教育研究」8号 昭和36）
滞仏所感の内より（ICU紀要「教育研究」11号 昭和40）
学問と信仰について（キリスト教文化学会年報 昭和41）
孔子の思想に関する若干の考察（一）（東京女子大学比較文化研究所「紀要」36巻 昭
和50）
人物評価の基準について（東京女子大学「論集」26巻1号 昭和50）
その他昭和30年頃より，キリスト教雑誌「キリスト教常識」とキリスト教共助会誌
「共助」に10数編寄稿。